

陳後主の七夕詩と六朝の侍宴七夕詩

久保卓哉

六朝の宮廷では七夕の宴が催され歌舞音曲とともに盛んに詩歌が作られた。宮廷での七夕詩を陳後主の場合を中心にして、西晋の皇太子と潘尼、陸機及び梁の武帝と任昉の七夕詩の特徴を明らかにする。

「キーワード」七夕 応酬詩 潘尼 陸機 梁武帝 任昉 陳後主

一 はじめに

七夕は、旧暦七月七日に牽牛と織女が一年に一度会うことができる夜で、わが国ではこの日、机の上に物を供え、五色の紙に願いごとや歌を記して竹に結びつけ、二人の逢瀬を祈る。

中国では古くからこの伝説があり、七夕の行事が行われてきた(1)。

梁・宗懐の『荊楚歲時記』に、

七月七日、牽牛・織女、聚会の夜と為す。

是の夕、人家の婦女、綵樓を結び、七孔の針を穿ち、或いは金・銀・鍮石を以て針を為り、几筵・酒脯・瓜果を庭中に陳

ね、以て巧を乞う。喜くも子、瓜上に網することあらば、則ち以て符ふ応おずと為す。(2)

とみえるように、六朝時代の梁においてすでに行事として定着していた。さらに時代をさかのぼると漢の「古詩十九首」に、

迢迢牽牛星 迢迢たる 牽牛の星

皎皎河漢女 皎皎たる 河漢あまのかわの女むすめ

織織擢素手 織織として 素手を擢のばし

札札弄機杼 札札として 機杼を弄す

終日不成章 終日 章あやを成さず

泣涕零如雨 泣涕 零おつること雨の如し

河漢清且淺　　河漢は　清く且つ淺く
 相去復幾許　　相い去ること　復た幾許ぞ
 盈盈一水間　　盈盈たる　一水の間
 脉脉不得語　　脉脉として（相い見るだけで）　語るを得ず

（『文選』卷第二十九）

織女星と牽牛星が天の川を隔てて逢うに逢えない悲しくも切ない
 愛がうたわれ、さらにさかのぼると『詩経』には、すでに次のよ
 うな歌がみえる。

維天有漢　　維れ天に　あまのかわ　漢　有り
 監亦有光　　監れば亦た光有り
 跂彼織女　　跂わかし彼の織女
 終日七襄　　終日　七襄す

雖則七襄　　則ち七襄すと雖も
 不成報章　　報章を成さず
 皖彼牽牛　　皖かがける彼の牽牛は
 不以服箱　　以て箱くるまを服ひかず

（『詩経』小雅大東）

『詩経』では、天の川に輝く織女星は機織りをしても織物ができ
 ず、牽牛星はそれを車にのせて運ぶことができない、とうたわれ
 ている。

こうした七夕伝説とそれをめぐる行事は六朝時代において益々
 盛んになり、なかでも六朝末の天子陳後主の七夕への思いは強く
 多くの詩を残している。

二 六朝の七夕詩と陳後主の七夕詩

陳後主には次のような七夕の詩がある。

- 1 七夕宴宣猷堂各賦一韻詠五物自足為十并牛女一首五韻物
 次第用得帳屏風案唾壺履
- 2 七夕宴重詠牛女各為五韻
- 3 同管記陸琛七夕五韻
- 4 同管記陸瑜七夕四韻
- 5 七夕宴樂脩殿各賦六韻
- 6 七夕宴玄圃各賦五韻
- 7 初伏七夕已覺微涼既引應徐且命燕趙清風朗月以望七襄之
 駕置酒陳樂各賦四韻之篇

これら陳後主の七首という数は、六朝のみならず隋唐を含めても
 その数は最も多い。(3) 試みに逯欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』の
 中から、六朝時代に七夕を詠じた詩の詩題と作者とを生卒の古い
 順から並べると次のようになる。

魏　文帝　　燕歌行

張正見 秋河曙耿耿

後主 七夕宴宣猷堂各賦一韻詠五物自足為十并牛

女一首五韻物次第用得帳屏風案唾壺履

七夕宴重詠牛女各為五韻

同管記陸琛七夕五韻

同管記陸瑜七夕四韻

七夕宴樂脩殿各賦六韻

七夕宴玄圃各賦五韻

初伏七夕已覺微涼既引應徐且命燕趙清風朗

月以望七襄之駕置酒陳樂各賦四韻之篇

これらの詩のうち本論では、宮廷の七夕宴で天子を中心にしてどのような詩がうたわれたかということを検討する。その視点で天子の七夕詩を見ると宋孝武帝の「七夕」一首、梁武帝の「七夕」一首、梁簡文帝の「七夕」「七夕穿針」二首、及び陳後主の七首があり、数としては陳後主の七首が際立って多い。しかもその詩題を見ると、四韻、五韻、六韻というように韻数に制限があったようで、さらに「七夕宴宣猷堂各賦一韻詠五物自足為十并牛女一首五韻物次第用得帳屏風案唾壺履」のように詠物の対象として屏風や唾壺をあらかじめ決めておいたようである。そこに陳後主の七夕詩の特徴がある。

三 陳後主の「七夕宴玄圃各賦五韻」

陳後主の七夕の詩は、七首のうちの一つをとっても興味深い。なぜならば「七夕宴宣猷堂各賦一韻詠五物自足為十并牛女一首五韻物次第用得帳屏風案唾壺履」と「七夕宴重詠牛女各為五韻」の二首を手がかりにすると、すでに別稿で論じたように「沈約の賦韻」とその後の「鉤韻」の実態と方法を解明できるからであり(4)、「同管記陸琛七夕五韻」と「同管記陸瑜七夕四韻」の二首は、陳後主の文学と陸琛、陸瑜の文学を明らかにする上で、好資料を提供しているからである。そしてここに論じる「七夕宴玄圃各賦五韻」はとりわけ文学的な評価が高い。

陳後主 七夕宴玄圃各賦五韻(5)

殿深炎氣少	殿は深くして	炎氣	少なく
日落夜風清	日は落ちて	夜風	清らかなり
月小看針暗	月	小さくして	針を見るに暗きに
雲開見縷明	雲	開きて	縷 <small>いと</small> を見るほどに明るし
絲調聽魚出	絲 <small>こと</small> の調 <small>こと</small> べありて	聽 <small>き</small> し魚出で	
吹響聞蟬聲	吹 <small>ふえ</small> の響 <small>ひび</small> きありて	聞 <small>き</small> (まじ)りて蟬聲をな	
度更銀燭盡	更 <small>とく</small> 度 <small>りて</small>	銀燭 <small>ぎんよく</small> 尽 <small>き</small>	
陶暑玉卮盈	陶暑 <small>たうしよ</small> のために	玉卮 <small>ぎよくし</small> に盈 <small>み</small> たす	
星津雖可望	星津は	望む可きと雖も	

詎得似人情 詎ぞ人の情に似せるを得んや

宮殿は奥深く、暑気はさほどでもなく、日が沈むと、夜風が涼しい。月あかりは小さくて針に糸を通す七夕の行事をするには薄暗いが、ちょうど雲がわかれて色の糸が見えるほどに明るくなった。玄圃園で奏でられる琴の調べを聞いて魚が水草の下から出てき、笛の音にまじって蝉が鳴いている。時が経って灯燭が消え、暑さを消すために大きな杯に冷たい酒をみたす。夜空を見上げると天の川は目に見ることができ、一年に一度しか会えない織女星はどうしてこの世の人の心と同じでありえようか。

この詩の第三、第四の二句と、第五、第六の二句の表現は特に描写が巧みである。「月小看針暗、雲開見縷明」の二句では、月光にかざして「針を見る」、雲の合間に「縷を見る」と、針と糸とを詠んでいるが、これは七月七日の夜に女性が七本の針に美しい色どりの糸を通す「乞巧奠」の行事をうたったものである。先に引いた梁・宗懐の『荊楚歳時記』に「是の夕、人家の婦女、綵樓を結び、七孔の針を穿ち、或いは金・銀・鍮石を以て針を為り、几筵・酒脯・瓜果を庭中に陳ね、以て巧を乞う」とあるのがそれで、『荊楚歳時記』は家庭の女性の七夕祭の様子を伝えたものだが、陳後主の宮廷でも同様に、玄圃園の庭に出て月に針をかざしながら糸を通したのである。美しい宮女が白い手に針と糸を

もって月明かりの下で糸を通す。月が雲に隠れて暗くなると「通らないわ」と声をあげ、月が現れると「通りそうだわ」と声をあげ、それを見守る陳後主や座客はどっと沸いて月を見上げ、雲のゆくえに一喜一憂したのであろう。この二句には月と雲の動きにつれて明暗が交互におとずれる光の動きがある。その光の下で針を持つ白い手があげる透き通った声の響きがある。月と雲、針と糸、明と暗との平易で簡潔な用語の対比の中から醸しだされる詩意はまことに動的で立体感を持つ。

この二句を清・陳祚明の『采菽堂古詩選』は「月小の二句は雋なり」（卷之二十九陳）、つまり「月小」の二句は傑出して良いと評し、中国科学院の曹道衡は「月小」の両句は針を浮かべ乞巧する七夕の情趣を生き生きと描いている。対句が見事で用字は極めて精緻であり、作者の芸術性がよく現れている」（『文学史百題』事修飾、望之嫣然『南朝文学史中的陳後主』文史知識一九九一年第三期）と評している

続く第五、第六の二句「絲調聽魚出、吹響聞蟬聲」には自然と音楽の合奏がある。弦と管、魚と蝉との四部重奏とでもいえるものである。

そもそも、魚の動きを詠んだ詩でよく知られたものに謝朓の「遊東田」（文選卷第二十二）がある。「魚戯れて新しき荷動き、鳥散ちて餘れる花落つ」がそれで、「こきざみに揺れる荷の葉から水温む春の水面下の魚の活動を知るといふ、自然の息吹をとらえる妙は他の詩人の追隨を許さない。その謝朓の詩「贈王主簿」（玉台新詠卷四）の初句「日落窗中坐」をまねて作った梁簡文帝の「擬

落日窗中坐」(玉台新詠卷七)に「游魚池の葉を動かし、舞う鶴階きんぼしの塵を散らす」があり、陳後主の二句もこの流れの中にある。だが陳後主の詩には自然と人間との融和がある。弦の音に誘われて魚が顔を出し、笛の音に合わせて蝉が鳴く。七夕の夜、庭のすべてが宴に参加しているのである。この二句を『采菽堂古詩選』は「絲調の二句は細なり」(卷之二十九陳一)、つまり「絲調」の二句には音楽の調べがあると評し、曹道衡は「絲調」の二句には、その時の音楽と自然の景色とが描かれていて、おのずと精細さがあらわれている」(同)と評しているのは、こういうことを指しているであろう。

そして、庭のすべてが七夕に参加する華やかな宴も、二時間以上がたつと銀燭の灯りが燃えつき、人は席に戻って暑さをしずめるべく玉の杯に酒をそそいで酌み交わす。語るは織女と牽牛の七夕のこと。星を見上げては織女の切なく哀れな境遇を語り、七夕の宴は過ぎてゆく。この詩の最後の四句からは、このような陳後主の七夕宴の情景が読みとれる。

この詩を収める『古詩紀』は題を「七夕宴玄圃各賦五韻」(七夕に玄圃に宴し各の五韻を賦す)と伝え、座客を記して「座有顧野王、陸瑒、姚察等四人上」(座に顧野王、陸瑒、姚察等四人有りて上る)と伝えているが、この詩の題「各賦五韻」という意味について言及しておかねばならない。この時七夕の宴に同席したのは、顧野王、陸瑒、姚察の三人と名は伝わらないが誰かもう一人との合計四人であったようだ。「各」とはこの四人と陳後主を指そう。そして「賦五韻」とは、陳後主の詩を見れば分かるように五つの韻

をふむ十句の詩を作るということである。その五つの韻字は、既に指摘したことがあったように(4)、あらかじめ決めておいた韻目に従うものであった。陳後主の場合、五つの韻字が「清、明、声、盈、情」であることから、その韻目は下平声「庚」であった。その「庚」の韻目に属する字を使って五韻十句の詩を作ったのである。したがって、四人の詩も「庚」韻に属する他の韻字、例えば、嘗、楨、頃、嬰、京、兵、兄、生等の韻字を用いて作詩したのである(6)。しからば、四人の詩も残っていないければならぬはずだが、残念ながら残っていない。おそらくは陳後主の詩ほども優れたものではなかったからであろう。

四 宮廷の七夕宴での応酬詩

六朝で七夕を詠じた詩のほぼすべてを右の第二章であげたが、この論で注目するのは個人の七夕詩ではなく、宮廷の七夕宴で天子と座客とで酬唱しあった詩である。視点をそこに絞ると六朝のなかでは陳後主の七夕詩以外に、西晋・潘尼の「七月七日侍皇太子宴玄圃園」と陸機の「皇太子宴玄圃宣猷堂有令賦詩」及び梁武帝の「七夕」が注目される。

(一) 西晋潘尼と陸機

潘尼が皇太子の七夕宴に侍したときの詩は次のようなものである。

潘尼 七月七日侍皇太子宴玄圃園

商風初授	商風 <small>あきかぜ</small>	初めて授かり
辰火微流	辰火 <small>ひのほし</small>	微かに流る
朱明送夏	朱明	夏を送り
少昊迎秋	少昊	秋を迎う
嘉禾茂園	嘉禾	園に茂り
芳草被疇	芳草	疇 <small>た</small> を被 <small>おお</small> う
於是我后	是に於て	我が后 <small>きみ</small>
以豫以遊	以て豫 <small>たの</small> しみ	以て遊ぶ

(下平声尤韻)

秋風が吹き始めて、辰火の星が西に傾こうとしている。太陽は夏を送り出して、少昊の神は秋を迎えいれようとしている。実りの穂が玄圃の園に茂り、香草が美田をおおっている。そのような七月七日の日にわが皇太子は、七夕の宴を楽しみ遊んでいらつしやる。

この詩に関したことが『初学記』にみえそこには「潘尼詩序、七月七日、皇太子会於玄圃園、有令賦詩」とある。この「潘尼詩序」からすると、潘尼は皇太子の命令でこの詩を賦したことが分かる。(7) この時の皇太子とは、潘尼が恵帝の元康年間に太子舎人であったことからすると、恵帝の長子である愍懷太子司馬遹が

その人である。この時皇太子に仕えていたのは、潘尼の他に、太子太師何劭、太子太傅王戎、太子太保楊濟、太子少師裴楷、太子少傅張華、太子少保和嶠(『晉書』卷五十三愍懷太子伝)及び、太子洗馬陸機、太子舎人陸雲、太子中庶子傅咸(吳文治『中国文学史大事年表』上「合肥」黄山書社一九八七年)等の、後にその高名を残す人々がいた。したがって皇太子の七夕の宴にはこれらの錚々たる顔ぶれが列席し、潘尼と同じく命をうけて詩を賦したのである。ところが、これら太子官のうち王戎、楊濟、裴楷、和嶠には作品そのものが伝わらず、張華、陸雲、傅咸については『文選』や『芸文類聚』に伝わる諸詩を調べても関連するものはない。また、『文選』卷第二十九に伝わる何劭の「雜詩」にはわずかにその初句の表現に潘尼の詩との類似性がみられるが、宴席での同時期の作ではない。その初句とは、潘尼の「商風初授、辰火微流(商風初めて授かり、辰火微かに流る)」にたいして何劭の「秋風乘夕起、明月照高樹(秋風夕べに乗じて起こり、明月高樹を照らす)」で、どちらも秋風が吹き始めたという歌い起こしであるが、潘尼の四言に対して何劭は五言であり、内容も七夕の宴とのつながりはない。だが、太子洗馬陸機には「皇太子宴玄圃宣猷堂有令賦詩」があり、これは潘尼と同じ時の詩であろうと考えられる。時に潘尼は四十四歳、陸機は三十三歳であった(8)。『文選』卷第二十に伝わる陸機の詩は次のようなものである。

陸機 皇太子宴玄圃宣猷堂有令賦詩

三正迭紹
洪聖啓運
自昔哲王
先天而順

三正 迭いに紹ぎ
洪聖 運を啓けり
昔自り 哲王
天に先んじて順う

(去声問韻)

羣辟崇替
降及近古
黃暉既渝
素靈承祐
乃眷斯顧
祚之宅土

羣辟は 崇り替れ
降りて近古に及ぶ
黃暉は 既に渝り
素靈は 祐を承く
乃ち眷みて斯に顧み
之に祚いて土を宅む

(上声慶韻)

三后始基
世武丕承
協風傍駭
天晷仰澄
淳曜六合
皇慶攸興

三后は 始めて基づき
世武は 丕いに承く
協らげる風 傍く駭り
天の晷は 仰ぐに澄みわたれり
淳いに六合を曜らかにして
皇の慶び 攸に興る

(下平声蒸韻)

自彼河汾
奄齊七政
時文惟晉
世篤其聖
欽翼昊天

彼の河汾自り
奄いに七政を齊う
時れ文たる惟の晉
世よ其の聖を篤くす
欽んで昊天を翼い

對楊成命
九區克咸
讌歌以詠

對えて成命を楊ぐ
九區は 克く咸ぎ
讌歌して以て詠う

(去声映韻)

皇上纂隆
經教弘道
于化既豐
在工載考
俯釐庶績
仰荒大造
儀形祖宗
妥綏天保

皇上は 隆きを纂ぎ
經教して 道を弘む
化に于ては 既に豊かに
工に在りては 載ち考る
俯して庶績を釐め
仰ぎて大造を荒いにす
祖宗に儀り形して
天保を妥やかに綏んず

(上声皓韻)

篤生我后
克明克秀

篤く生まれし 我が后
克く明らかに 克く秀づ

(去声宥韻)

體輝重光
承規景數
茂德淵沖
天姿玉裕

輝は重光に體して
規は景數に承く
茂徳は 淵のごとくに沖く
天姿は 玉のごとくに裕かなり

(去声遇韻)

蕞爾小臣
邈彼荒遐
弛厥負擔

蕞爾たる 小臣
邈かなる彼の荒遐よりす
厥の負擔を弛めて

振纓承華 纓を承華に振のう
 匪願伊始 願いは伊れ始めに匪す
 惟命之嘉 惟だ命の嘉きなるかな

(下平声麻韻)

これを見ると陸機は直接には七夕をうたっていない。うたうのは晋の皇室の正統性と、天子恵帝の聖徳性への讃歌、そして宴の主である皇太子の茂徳の深さと天姿の美しさへの讃歌である。そして最後に自らのことを述べて帝室より賜った幸運に感謝している。直接には七夕をうたわないが、しかし、天にまつわる言葉を選んで帝室を讃歌している。「天に先んじて順う」と詠み、「天の晷は仰ぐに澄みわたれり」と詠み、「欽んで昊天を翼う」と詠み、そして「奄いに七政を齊う」と詠むとき、座はその語の音を聞きたび目を天空に転じたであろう。「七政」の語も、『尚書』舜典に「以て七政を齊う」その漢・孔安国の伝に「七政は日月五星なり」とあるように天空の惑星をいう。

陸機と潘尼の詩を比べると、陸機の侍宴の詩は去声問韻の二韻四句、上声麌韻の三韻六句、下平声蒸韻の三韻六句、去声映韻の四韻八句、上声皓韻の四韻八句、去声宥韻の一韻二句、去声遇韻の二韻四句、下平声麻韻の三韻六句を用いた二十二韻四十四句の長詩であるのに対して、潘尼の詩は下平声尤韻の四韻八句の短詩である。これは潘尼の詩が『芸文類聚』や『初学記』『古詩紀』に四韻八句だけが伝わって他は滅んだからで、潘尼の詩も陸機と同じく二十二韻四十四句の長詩であった可能性が高い。共に四言であり、どちらも「我后」という語を用いて皇太子をうたっている

ることからもそれはいえる。潘尼の八句には、七夕宴で遊ぶ皇太子を描くゆとりがあると感じられるのに対して、陸機の詩には晋の帝室をたたえることに終始するある種の緊張が感じられる。その因の一つとして、四十四歳の潘尼に対して、三十三歳の陸機という年齢の差が考えられるかもしれない。だが、太子舎人と太子洗馬という太子官属の差にその因があると考えるのは無理であろう。どちらも官品は第七品である(『通典』職官十九晋官品)。

なお、『芸文類聚』巻第九十六鱗介部上鼈には潘尼の「鼈賦」と陸機の「鼈賦」がみえ、その序に「皇太子玄圃に遊びて、遂に釣魚を命ず。鼈を得て之に戯れる者有り。侍臣をして之を賦せしむ(潘尼鼈賦序)」、「皇太子釣台に幸し、漁人鼈を献ず。侍臣に命じて賦を作らしむ(陸機鼈賦序)」とある。これら二つの賦はどちらも皇太子とともに玄圃園に遊んだときに下命を受けて作ったと考えられる。その時期を呉文治『中国文学史大事年表』は七月七日の七夕の時としている。根拠をとくに示していないのだが、その根拠には、潘尼が「鼈賦」で「若し乃ち秋水暴該し、百川沸流すれば」と秋の水を詠み、潘尼の「七月七日侍皇太子宴玄圃園」では「商風初めて授かる」「少昊秋を迎う」と初秋の風を詠んでいることをあげることができであろう。また、陸機には「織女賦」があつたことが『北堂書鈔』巻第一百三十六履八十一に「陸機織女賦、足躡刺繡之履」とのみ断片が伝わっている。

ところで、七夕と秋風とは一致しないと考えるむきもあるかもしれないが、それは現行の太陽暦の季節感であつて旧暦の七月七日は初秋にあたる。皇太子が玄圃で七夕宴を開いた年を呉文治は

元康三年（二九三年）に比定しているが、この比定にしたがって元康三年の七月七日を陳垣の『二十史朔閏表』をもとに換算すると、太陽暦では八月二十五日に相当する（9）。潘尼が七夕の宴で詠んだ「秋水」「商風」「迎秋」の語はまさしくその時の季節感にもとづいたものであった。

(二) 梁武帝と任昉

天子もしくは皇太子の七夕宴での詩を西晋から時代をくだって求めると、梁武帝の「七夕」がある。その詩は次のようなものである。

梁武帝 七夕

白露月下圓	白露	月の下に圓く <small>まる</small>
秋風枝上鮮	秋風	枝の上に鮮 <small>あざ</small> かなり
瑤臺含碧霧	瑤臺は	碧の霧を含み
羅幕生紫烟	羅幕に	紫の烟 <small>もや</small> 生 <small>な</small> ず
妙會非綺節	妙會は	<small>はたおりのとき</small> 綺節 <small>に</small> 非 <small>ず</small>
佳期乃涼年	佳期は	乃ち涼年なり
玉壺承夜急	玉壺は	夜を承けて急に
蘭膏依曉煎	蘭膏は	曉に依りて煎 <small>き</small> ゆ
昔時悲難越	昔時は	越え難きを悲しみ

今傷河易旋	今は傷む	河の旋 <small>かえ</small> り易きを
怨咽雙斷念	怨咽して	雙つながら念 <small>おも</small> いは斷たれ
悽悼兩情懸	悽悼たり	兩つの情 <small>こころ</small> 懸 <small>へ</small> るは

七夕の夜白露が月明かりをうけてまるく光り、初秋の風が木々の枝に鮮やかに吹きわたる。天上の玉の楼台は緑の霧に深くつまれ、絹のとばりには紫のもやがしのびよっている。今宵はよき逢瀬の日で機織りをする日ではない、一年に一度逢えるこのよき日は涼しくすがすがしい。だが、漏刻の壺の水は夜が深くなるにつれて滴りが急になり、香りのよいろうそくは夜明けが近づいて消えてしまった。もう逢っている時間はない。これまでは渡つて会いに行けないことを悲しんでいたが、今は河をこえて帰りやすいことが傷ましい。悲しい嗚咽は二つの思いをはずたずたに断ちきつてしまふ、なんと傷ましいことか、二人の心は再び遠くかけ離れてゆくのは。

梁武帝はしかし、詩の出来映えがはなはだ不満であつたらしく、吏部郎中で史文の編纂にあたる著作の任にあつた任昉に次のように詔つげている。

聊か七夕詩五韻を為るも、殊に未だ詠歌に近からず。卿は言に訥たと雖も、才に辯たたり。即ち制たして使者に付さけよ。

（梁武帝「詔」、『文選』卷第三十九任昉「奉答勅示七夕詩

啓「李善注引」

「七夕の詩五韻を作ったがすぐれた詩歌とはほど遠い。任昉は弁舌は重いが、言い回しはうまい。すぐに正して使者にことづけよ」と任昉に命じているのである。そのとき下命を受けた任昉がただちに梁武帝に奉った文が『文選』に収められている。「奉答勅示七夕詩啓」がそれである。

臣任昉が申しあげます。詔をうけたまわり併せて七夕の詩五韻を拝見いたしました。

考えますに陛下の功績は多くしかもさまざまです。情を詩に託されますと、世にたくいまれな巧みさを發揮されます。漢には武帝があり魏には武帝・文帝・明帝の三祖があります。舜の南風の詩のごとく調露の樂のごとき陛下の詩歌には及びません。陛下は生れながらにして天道にかなひ讃辞も見つからないほどです。幸いにもわたくしは陛下に親しくお目通りさせていたでいます。陛下が潜龍のころより奉仕して賈誼や司馬相如の詩賦の奥義をきわめ、後に帝位につかれは漢の嚴安・徐樂に倣って陛下の詔命を待っています。

陛下は理解してわたくしの訥弁を大目にみ、利を求めても疵とせず弁才ありとお戯れになりました。謹んでわたくしめが陛下のご下命にお答えします。拙いながらも迅速にはありませんが、粗悪さが目立ちます。この啓に臨み恥じ入るばかりで身の置き所がございません。謹んで申しあげます。

(任昉「奉答勅示七夕詩啓」『文選』卷第三十九)

この啓を読むと、あくまで天子の作を称賛しながら控えめに自らの詩を添えて出した様子が伺える。だが残念ながら、粗悪と謙遜して使者に託した任昉の詩は残っていない。しかしながら、梁武帝作の七夕詩は、右に引いた任昉への詔に「聊か七夕詩五韻を為る」とあるように、もとは五韻十句であったはずであるのに、『玉台新詠』に伝わる梁武帝の詩は六韻十二句（下平声先韻）であることからすると、この梁武帝の七夕詩は任昉の手を経た後の作である可能性がある。

ところでこれはいつの事であったのだろうか。『梁書』任昉伝の次の記述が教えてくれる。

高祖踐阼するや、黃門侍郎を拜し、吏部郎中に遷り、尋で本官を以て著作を掌る。天監二年、出でて義興太守と為る。

(『梁書』卷十四任昉伝)

梁武帝が即位したとき任昉は内官の吏部郎中で著作をつかさどり、天監二年に外官の義興太守として外に出たという。したがって任昉が「奉答勅示七夕詩啓」を奉ったのは天監二年より以前で梁武帝の即位の後となる。梁武帝の即位は天監元年であるから、それは天監元年の事であったことになる。(10)

ここで興味深いのは、七夕詩の出来映えにこだわって任昉に修正を命じたのが即位の年であることである。『梁書』武帝紀によ

ると武帝の即位は四月八日(丙寅)で、五月には陳伯之が挙兵し、六月には劉季連が叛乱を起こして政情は甚だ不安定であった。そのような中で即位後初めて行われた七夕宴である。規模を盛大にする上にそこで示される天子の詩歌は他を圧倒する出来映えのものでなければならなかったはずである。しかも二人は斉の永明年間に竟陵王子良の西邸に集って謝朓、沈約とともに八友と称された梁武帝と任昉である。梁武帝が任昉に修正を命じたのは当然であった。時に梁武帝三十九歳、任昉四十三歳のことであった。

この天監元年七月七日、梁武帝の長子昭明太子蕭統はまだ皇太子ではなく三カ月後の十一月十日(甲子)に皇太子として立つ。時に二歳であった。第三子で昭明太子の同母弟である簡文帝蕭綱はこの時はまだこの世に生をうけておらず翌年の十月二十八日(丁未)に誕生する。

その簡文帝にも「七夕」詩がある。それを紹介してこの稿を終えよう。

梁簡文帝 七夕

秋期此時決	秋期	此の時決り
長夜徒河靈	長夜に	河靈 <small>おりのめうつ</small> 徒る
紫煙凌鳳羽	紫の煙	鳳羽を凌 <small>しの</small> ぎ
紅光隨玉輶	紅の光	玉輶 <small>たまのくるま</small> に隨う
洛陽疑劍氣	洛陽にては	劍氣かと疑い
成都怪客星	成都にては	客星かと怪しむ

天梭織來久 天の梭ひ 織り來たること久しくも
方逢今夜停 方まさに今夜停やむに逢う

織女と牽牛が会おう時になり、長い夜靈妙な織女が天の河をわたる。紫の毛やを鳳の羽がしのいで飛び、走る玉の車のあとから紅い光がついてゆく。洛陽ではそれを斗宿と牛宿の星を衝く名劍の気かと疑い、成都ではそれを新星かと怪しむ。天上の機織りの杼ひはずっと織り続けてきたが、今宵ようやくその動きが止まる時が来た。

六 あとがき

織女星と牽牛星の七夕伝説は、古く『詩経』に歌われていると始めに述べたが、なぜそれが織女と牽牛なのか、またなぜ逢いたくとも逢えないのか、それがどうして一年に一度だけ会えるのか、分からないことばかりであった。小南一郎著『西王母と七夕伝承』を読み、守屋美都雄訳注『荊楚歳時記』の注をたどり、わが国と中国の七夕に関する論文を取り寄せて読んだが、一向に疑問は解決しなかった。だが近刊の書『長江文明の探求』(梅原猛・安田喜憲共著新思案社二〇〇四年)の梅原猛の仮説を読んで一気に解決した。梅原猛はいう。

七夕っていうのはね、南中国で水稻をつくっていた稲作農耕民の養蚕をしていた女性が、捕えられて北へ行った悲しい歴

史の生んだ伝説であると思えますよ。黄帝の夫人が絹織物が好きだった。そこで、南の女性たちが捕えられて北へ連れていかれた。そういうことが伝説にありますからね。だから南に残された夫は、子供を抱えて、そして北の空を見て自分の妻を思つて、一年に一回会えるという夢を抱いたんじゃないか。それは牽牛・織女と言いますからね、牽牛というのはやはり牛を使つた稲作農耕ですよ。織女というのは機織りはたお姫ですからね。稲作は養蚕を伴う。

梅原は、これは以前の説で、今はまだ「僕だけの説だけど」と控えめだが、私には南の長江文明が北の黄河文明にとつて替わられる過程で生まれた伝説だという梅原の説が最も説得力があった。七夕の解明は文献よりも考古の出土物によってなされるのかもしれない。

注

- (1) 小南一郎著『西王母と七夕伝承』平凡社一九九一年に詳しい。同書は、論文「西王母と七夕伝承」、『東方学報』京都第四十六冊一九七四年三月と論文集『中国の神話と物語り』岩波書店一九八二年を、大幅に書き改め、図版も倍ほどに増やし、て(同書あとがき三三四頁)出版。
- (2) 『叢書集成新編』「台北」新文豊出版民国七十五年に収める明・万曆陳繼儒輯刊本『寶顏堂秘笈』輯による。
- (3) 遠欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』(北京)中華書局一九八三年第一版)及び『全唐詩』(北京)中華書局一九六〇年第一版一九八五年第三次

印刷)を調査した結果。

- (4) 拙論「陳後主の鈎韻と沈約の賦韻及び陳後主の逸詩」宣猷堂宴集五言」、『中国中世文学研究』二〇〇四年十月
- (5) 遠欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』を参照文献とした。以下同じ。
- (6) 作詩の韻を振りわけけることを賦韻というが、その方法は幾通りか考えられる。一、複数の韻目から一つを選び、それを全員が共有して作詩する。二、複数の韻目から各自が一つずつ分け与えられ、それぞれが違う韻目で作詩する。三、韻目をあらかじめ決めておき、その韻目に属する韻字を自由に用いて作詩する。四、韻目とその韻目に属する韻字をあらかじめ決めておく。五、韻目と韻字をあらかじめ決めるだけでなく、用いる順番も決める。明・徐師曾の『文體明辯序説』にいう「次韻」がこれにあたる。
- (7) 遠欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』晋詩卷八「初学記十引潘岳詩序云、…。当即此篇原序」の「潘岳詩序」は「潘尼詩序」の誤り。
- (8) 吳文治『中国文学史大事年表』(上)「合肥」黄山書社一九八七年は、潘尼の「七月七日侍皇太子宴玄圃園」と陸機の「皇太子宴玄圃宣猷堂有令賦詩」を元康三年(二九三年)の作とする。同書の生卒考証によれば時に潘尼四十四歳、陸機三十三歳となる。
- (9) 『増補二十史朔閏表』陳垣編董作賓増補「台北」芸文印書館中華民國六十年一月再版と、『中国年曆簡譜』董作賓撰「台北」芸文印書館中華民國六十三年二月再版とを参照した。
- (10) 羅国威編『沈約任昉年譜』『學術集林』第十四卷遠東出版社一九九七年(『六朝作家年譜輯要』上冊、劉躍進范子燁編「哈爾濱」黑龍江教育出版社一九九九年収)と、曹道衡劉躍進著『南北朝文学編年史』(北京)

The Poems of Chen Hou Zhu and Other Emperors and Subjects at the Star Festival Banquet in Six Dynasty

Takuya KUBO

The Star Festival banquet was held with music and dance and there were many poems written at the court of Six Dynasty.

In this essay I will reveal characteristics of Star Festival poetry of Xi Jin's crown prince and his subjects Pan Ni and Lu Ji , and Liang Wu Di and his subject Ren Fang , focusing around Chen Hou Zhu.

Keywords: Star Festival, Exchanging Poetry, Pan Ni, Lu Ji, Liang Wu Di, Ren Fang, Chen Hou Zhu